

# くらし・家庭

## 谷中のリボン

① 山崎 範子

「国産リボン発祥の地」と書かれたプレートが「谷根千」の一角に立っている。東京都台東区谷中初音町（現在の谷中3丁目）に、日本で初めて動力織機によるリボンを織る工場ができたのは、1894年（明治27年）のことだった。

明治になり断髪令が出されて以後、鬘を切って寂しくなった男性

に帽子が大流行。鹿鳴館時代には女性も髪掛けにリボンを装うようになった。帽子やリボンの輸入量が急増するなか、渋沢栄一が帽子会社を89年に設立、少し遅れてリボン工場が生まれたのだ。

創設者の岩橋謹次郎は、日本橋白木屋呉服店の支配人で桐生織物の重役、工場設立より

10年も前の84年にリボンを織れる自動製織機を輸入している。しかし、機械を動かす技術者がいなかったのか、リボンが国内で織られた記録は87年より古いものが見つからない。

その後、桐生から呼んだ織物職人、青木道蔵のもとで技術刷新が行われた。1901

### 「東洋一」の工場誕生



「谷根千」の一角にある国産リボン発祥の地のプレート

年、岩橋はドイツ・ルードルフ社へ、複雑な模様髪掛けリボンの織れる織機を発注。そして機械の到着を待って、渡辺四郎、鈴木哲という2人の技師が入社した。

リボン工場は名称を変えながら、10年には渡辺四郎が引き継いだ。欧米から織物や染織、養蚕、織機、経営などの文献を取り寄せ、自身も視察に就く。東洋一と言われたリボン工場は、四郎が亡くなった後も鈴木哲や、その息子が66年まで操業した。

リボンの生産が終わ

った後も、北側に窓を持つ「のこぎり屋根」の建物は町の目印として愛され、2013年9月に解体された。さて、解体から1年が過ぎたある日、四郎が収集した資料が、百年の眠りから覚め、元工場の事務所にあった書棚から発見された。

その中にはヨーロッパで織られたリボンの見本帳や、日本で初めて織られたらうりリボン見本も遺されていた。その資料の一部を今、東京家政大学博物館で見ることが出来る。

（谷根千工房）  
（金曜掲載）



新収蔵資料紹介「谷中リボン」展は2023年2月6日まで東京家政大学博物館で